

西川盛雄

熊本大学教育学部教授

最終講義

平成21年(2009)3月20日(金)



ハーン・レリーフ(熊本大学構内)

熊本大学

くすのき会館・レセプション・ルーム

一英語学徒の歩み（時の記憶）

【御挨拶】

親愛なる皆様に、

本日は最終講義の日です。休日にもかかわりませず遠方からも来ていただき感謝の心でいっぱいです。ありがとうございます。

生れは神戸市です。概ね瀬戸内海や船の行き交う港を日々眺め、六甲山の麓で学生生活を送りました。昭和44年（1969）4月に熊本大学に赴任、途中フルブライト奨学生、国際ロータリー財団の奨学生としての留学期間がありますが、今年で熊本大学在職四十年になります。赴任の時は8月20日まで授業が行われず、学内は学園紛争のまっただ中でした。

研究に関しては国内外の優れた恩師にめぐまれ、今も感謝と尊敬の念でいっぱいです。学部ときは小西先生からは **non-native speaker** の立場で日本人ならではの研究をし、先人に倣いながらも欧米の学者の真似ごとで終始しないようにとよくいわれました。英語学を目指す人の基本として事例を大切に、「英語のことは英語に語らせる」ことをモットーに用例をカードにとって分類・整理すること、書評をすること、調べたことを書くことを学びました。小西ゼミ第一期生として同期の友人と共に切磋琢磨した日々がよい思い出です。大学院では毛利可信先生からは英語の意味論・語用論の手ほどきを受け、ヴィトゲンシュタインやバートランド・ラッセルの数理意味論を学びました。成田義光先生からは当時としては最新の生成文法理論の手ほどきを受けました。

Geoffrey N. Leech 先生は丁度サバティカルでしたがランカスターにおられたので毎週一回一対一の指導をしていただくという幸運に恵まれました。先生の下で書いた「複合語」の論文によって形態論に深入りすることになりました。この時期を境に語形成の諸問題に取り組むことになります。その後やがて『言語と認知』の問題に進み、現在もレキシコンの問題を研究しております。

研究成果は継続して発表してきましたが、特に科学研究費補助金（科研費）や大学からの出版助成によって研究は進みました。出版としては特に『英語接辞研究』（開拓社：単著）、『現代英語語法辞典』（三省堂：分担執筆）、『ハーン曼茶羅』（北星堂：編著）などが忘れ難いです。

教育学部英語科では「自らリサーチすること」と「英語力の向上」を一貫したコンセプトとしてゼミ指導を行いました。学生には社会に出てその人格と専門性において信頼されるに値する人材になるように、また生涯の良き思い出を多く作ってもらいたく、発表を兼ねたゼミ旅行を毎年行い、卒論の製本を行いました。授業としては英語学Ⅰ、演習、講読、異文化理解、英語コミュニケーションなどの講義をさせていただきました。

教養部では教養の何たるかを考えました。既習外国語（英語）の授業に加えて大学改革の一環として教養部改革の中で総合科目（現学際科目）の創出や楔形のカリキュラム作成にも参画いたしました。研究室にはいろいろな学部の学生が出入りし、落ちた学生には「どうしよう会？」なるものを作り励まし合い、出入りしていた学生を中心に詩歌の創作や評論などの小雑誌を発行して彼らに表現の場を提供いたしました。

事情があつて学部頃から言語病理学（言語障害学）の勉強をしていました。アメリカ留学での専攻は言語学ですが副専攻は言語病理学です。ここで幼児の言語発達、言語と大脳、失語症、吃音、難聴、構音障害などの授業を受けていました。後に熊本県言語障害児研究会を昭和 45 年（1970）に組織して研究誌を出し、今ではそのメンバーだった方々が学校の「ことばの教室」や病院の言語療法士（ST）として臨床の場で活躍しておられます。後に『言語障害の診断と治療』（ナカニシヤ出版：共著）を出すことは私の必然でもありました。

熊大にいてラフカディオ・ハーン（小泉八雲）と夏目漱石に関心を持ち始めたのは教育学部に移ってからのことです。新たに「異文化理解」という授業を英語科で誰かしなくてはならなくなり、たまたま私が担当することになったことがきっかけでした。忘れられないこととして、平成 16 年（2004）のハーン没後 100 年のハーン・レリーフの制作に当たっては全学の有志の教職員の協力が得られ、いつまでも残るものになりました。平成 17 年（2005）と平成 20 年（2008）には熊本大学から出版助成を得てハーン出版を行うことができました。

国際交流では昭和 50 年代からボランティア的に留学生の世話と日本語教育に当たりました。留学生センターはまだなく、全学で留学生数が 40 人ほどの時代です。やがて後に国際交流委員として大学としての国際交流の中・長期的計画の策定に関わり、教員や学生の相互の受入れ・派遣に関与し、学部の国際交流委員長を拝命してすぐに国際交流誌『水輪』を発行して将来への記録とし、英国、中国、韓国、台湾の大学との交流協定締結や継続の仕事に携わりました。最近のリーズ大学との交流協定締結のためにリーズに行つて熊大を紹介、交渉したことが最後の仕事になりました。

教養部時代から続いていた分野の異なる先生方との「読書会」を 25 年ほど続けました。私にとってとても大切なひと時でした。毎週一度科学哲学的な論文や古典の名著を読み合わせ、耳学問的に異分野からの貴重な話を直接聞く機会をもちました。このことが私の研究に少なからぬ影響を与えました。

アメリカ滞在中の日系移民の一世・二世の方々との出会いは大きな衝撃でした。戦時中アメリカにあつて彼らが引き受けざるを得なかった辛い経験は今もテーマとして大切にしています。イギリスでロンドン漱石記念館の開館に立ち合せていただいたこと、お世話になったホストファミリー、ザルツブルグでの画家（彫刻家）や音楽家との出会いは大きな恵みでありました。特に文通の中で私の送った英詩にあるドイツ人が作曲して楽譜が送られてきました。後に友人で熊本の音楽家の協力を得てコンサートを開くことができたことは忘れられぬ思い出です。

現在、大学は独立行政法人となり、研究や教育も厳しい環境におかれています。地域貢献と国際貢献がキーワードです。今を踏ん張り、外部評価に耐えられるよう粘り強いチャレンジ精神をもって良い *milieu* を作り出していくことが大切だと思っております。大学における *milieu* の大切さは 2001 年に熊本大学に来られたノーベル・ミュージアム館長リンキスト博士から直接学んだ言葉です。

日本に異文化が入ってきてその後どのような運命をたどったかというテーマで所縁の場所を訪れ、随分と旅をいたしました。学生に連れて行ってもらった阿蘇（高岳）登山がきっかけで山歩きにはまり、一時随分と歩きました。また毎年のゼミ旅行も懐かしく思い出されます。授業の最初に行う「立田山散策」は定年の最後の年まで一度も欠かしたことはありませんでした。

月並みですが「光陰矢のごとし」とはよく言ったものです。出来たことより出来な

かったことへの不甲斐なさが残ります。持続する志が明日に向かう力となります。出来なかったことを課題としてまた新たな気持ちで精進してまいりたいと思います。

流されていくがごとくに生きながら流れの中に打ち立てる杭

英語科の同僚の先生方、図書室の今村さん、卒業生そして現役の学生諸君、長い間本当に有難うございました。英語教員養成の場で教鞭を取るという仕事を長年させていただいたことは恵み以外の何ものでもありません。状況は恒に困難です。その困難な状況を引き受けてより良く生きることが人生だと思います。研究と教育を軸にこれからも熊本大学が、そして教育学部、そして英語科がますます充実発展していけますことを心より祈念いたしております。

西川盛雄

平成21年3月20日

[Memorandum]

(1) 恩師(指導教官)

小西友七先生 (神戸市外国語大学)

毛利可信先生 成田義光先生 (大阪大学)

Gerald Sanders 先生 (米国: ミネソタ大学)

Geoffrey N. Leech 先生 (英国: ランカスター大学)

(2) LSA Summer Institute 参加

マサチューセッツ大学 (1974)

ハワイ大学(1979)

ザルツブルグ大学(1983)

バルセロナ大学(1989)

(3) 奨学金派遣・留学

フルブライト奨学金 (1973--1974) ミネソタ大学 (米国)

ブリティッシュ・カウンスル若手英語教員研修派遣 (1979) レディング大学 (英国)

国際ロータリー奨学金 (1985--1986) ランカスター大学 (英国)

(4) 科学研究費補助金

・『ラフカディオ・ハーンに関する比較文化論的研究』(分担研究者)

平成12年～15年 基盤研究(B)

・『英語の形態論・意味論・語用論研究と辞書学に基づく「英語接辞辞典」の作成』

(研究代表者) 平成14年～17年 基盤研究(C)

・『ラフカディオ・ハーンのガラス乾板の判読、復元、日本語訳』(研究代表者)

平成18年～20年 基盤研究(C)

(5) 学会・社会貢献

>学会

・日本英語学会々員 (評議員: 1995/4～2007/3)

・日本英文学会九州支部学会々員 (評議員: 2005/4～2009/11)

・熊本大学英文学会々員 (会長: 2005/4～2009/11)

・英語語法文法学会会員 (1989/4～現在)

・日本語用論学会々員 (1997/4～現在)

・日本英学史学会々員 (2006/4～現在)

>社会貢献(現在)

・熊本市立図書館協議会々長 (2002/4～現在)

・小泉八雲旧居保存会理事 (2005/4～現在)

・熊本八雲会副会長 (2005/4～現在)

・熊本アイルランド協会理事 (1997/4～現在)

・夏目漱石内坪井旧居世話人 (1997/4～現在)

・熊本大学学術資料調査研究推進室委員 (附属図書館) (2002/4～現在)

・『草枕』国際俳句大会副会長・外国語部門選者(1996/4～現在)

(6) その他

○ 忘れえぬ人々 (恩師・英語学関係以外; 敬称略)

末石 経 近澤龍雄 佐々木四郎 魚津郁夫 国弘正雄
小泉 時 小泉 凡 劉 茂源 神山五郎 内須川洸 川名子義勝
安永蓆子 木下順二 光岡 明 塚本邦雄 稲畑汀子 谷川俊太郎
本田節子 吉増剛造 北御門二郎 山崎豊子 檜山 茂 住山貞一
マリア・フィッシャー、 エファ・マツッコ レイコ・(シェラム)・クエック
クラタ先生、 田中欣二 ジョン・イングルスルド マルフォード・シブレー
エンドーさん コト・キリハラさん スティーヴン・レティギ

○ 忘れえぬ絵画とステンドグラス——西川美術館?

> 東山魁夷 平山郁夫 葛飾北斎 青木繁 三橋節子 ジョルジュ・
ラ・トゥール フェルメール レンブラント ベラスケス ゴヤ エ
ル・グレコ ムリッリョ、サルバドール・ダリ、クールベ クロード・モ
ネ ルオー マグリット パブロ・ピカソ マティス ダ・ヴィンチ
ミケランジェロ
> ナショナル・ギャラリー (ワシントン D.C.) メトロポリタン・ミュージアム (NY)
シカゴ・ミュージアム、フリーア・ミュージアム、ボストン・ミュージアム
テート・ギャラリー、ナショナル・ギャラリー (ロンドン)、ルーブル、オルセ
ー、ナショナル・ギャラリー (ウィーン)、プラド、レンブラント・ハウス、ゴ
ッホ・ミュージアム、ピカソ・ミュージアム、ダリ・ミュージアム、ウフィジ・
ミュージアム、システィーナ礼拝堂、東山魁夷美術館 (長野)、石橋美術館 (久留
米、東京)、西洋近代美術館 (上野)、
> シャルトル、ノートルダム、ウェストミンスター、ヨーク、カンタベリー、
サン・ピエトロ、フィレンツェ花の大聖堂、

○ 旅 (異文化接触の痕跡を求めて)

> 臼杵・佐志生<黒島> (日本で最初に英語の入った所; W. Adams)、平戸 (イギ
リス商館、17C. の英語)、鹿児島 (薩摩辞書)、中津 (福沢諭吉、細川忠興・ガ
ラシャ夫人)、佐賀 (鍋島直正、大隈重信、高島秋帆、江藤新平)、長崎 (出島、
シーボルト)、平戸 (イギリス商館跡、三浦按針)、北九州小倉・門司 (森鷗外・ア
インシュタイン、門司駅)、下関 (講和条約、壇ノ浦、赤間神宮)、竹田 (滝廉太
郎)、柳川・南関 (北原白秋)、久留米 (夏目漱石、青木繁・坂本繁二郎ら)、河
浦 (ゲーテンベルグの印刷機、コレツヂオ)、本渡・原城・湯島<談合島>・島原半
島 (島原の乱)、大分<府内>・津久見 (大友宗麟)、宇土 (小西行長)、水前寺
(ジェーンズ邸、熊本洋学校、熊本バンド、日本赤十字)、三角 (三角西港、浦島
屋)、松山 (正岡子規、夏目漱石)、大阪 (緒方洪庵: 適塾)、札幌 (北大、クラ
ーク先生)、旭川 (アイヌ語 (文化)、屯田兵)、函館 (五稜閣)、萩 (長州)、
小豆島、小樽 (石川啄木)、盛岡 (石川啄木)、仙台 (支倉常長)、花巻 (宮
沢賢治)、塩釜 (塩の道)、平泉 (藤原三代)、松山 (正岡子規、愚陀仏庵、秋
山兄弟、種田山頭火)、長野 (東山魁夷)、小布施 (北斎)、伊賀 (芭蕉生誕地)、
沖縄 (琉球語、琉歌、首里城、戦跡)、静岡・焼津 (久能山東照宮、ハーン)、富
山 (へるん文庫、北前船)、犬山市 (明治村)、松江・出雲・美保関 (ハーン)、

比叡山（最澄）、高野山（空海）、飛鳥・斑鳩（飛鳥寺、法隆寺、渡来人）、大和・河内（聖徳太子）、沓岐・五島（福江島）、

.....
> 台湾（蘭ユー、ゼーランジャ城）、中国（上海—南京） スコットランド（エディンバラ、ハイランド）、アイルランド（ダブリン、アラン島、ゴールウェイ）、北ウェールズ イタリア（ローマ、ジェノヴァ、フィレンツェ、ミラノ、ピサ）、イスラエル（テルアビブ、エルサレム）、ギリシャ（アテネ、レフカダ島）、韓国（釜山、蔚山、慶州）、オーストリア（ウィーン、ザルツブルグ、インスブルック）、ドイツ（ウルム、ベルリン、ミュンヘン、ライプツヒ、マイセン、フランクフルト、ボン）、スペイン（バルセロナ、マドリッド、グラナダ、セビリア、コルドバ、トレド、モンセラート）、バスク地方（サン・セバスチャン）、オランダ（アムステルダム）、フランス（パリ）、スイス（ジュネーヴ）、

○ 登山(山歩き)

九重全山、阿蘇五岳、祖母山・傾山、由布岳、韓国岳、宝満山、国見岳
白馬山麓 阿蘇外輪（冠山、俵山、鞍岳） 雲仙岳
ウンター山（ザルツブルグ）、マッターホルン（ツェルマットから途中まで）、
モンブラン（ケーブル・ゴンドラ使用）、イギリス湖水地方の山麓、キラウエア
火山、ダイヤモンドヘッド、ハイランドの丘陵、

○ 継続、

・立田山散策授業

○ ゼミ旅行： 湯山（市房山）、高千穂、別府、九重（研修センター）、阿蘇（青年の家）、
黒川温泉、天草（松島）、天草（下田）、天草（牛深）、島原（研修センター）、
由布院、長崎市、御所浦、唐津一呼子、沓岐（島）、杖立温泉、沖縄（琉大）、五島（福江島）、五木村

○ 尊敬心と平和への願い

I S C（国際学生会議）のこと（ひとつの挫折）
Truman Library の記憶 Kurata 先生のこと Reiko Shellum さんのこと
Pearl Harbor の記憶 Mulford Sibley 先生のこと Berlin の壁
釜山・蔚山のこと、『グラント・ゼロの歌』の英訳のこと

○ 特技

速記（中根式）

○ いつまでも残るもの

ハーン・レリーフ（皆さんのご協力で）

最終講義に寄せて

時巡りいつか必ず来るこの日重ねて今日のいのちよろこぶ

海峡を潜（くぐ）りて私の赴任する夜行列車の先のあけぼの

額づきし春しづかなる泰勝寺ガラシア夫人の墓碑に來たりて

ひっそりと夢たしかなる花びらの白き祈りのごとき睡蓮

大学の苦悩悟りぬ赴任の日教官会に放り込まれて

「あなたは誰？」問われてひるむ我ありき答え返して授業する日々

天空を茜に染めて夕焼けの雲型定規さながらの雲

積乱の雲居は白き雷（いかづち）の立ち上がりたる怒りなるべし

研究のテーマ追いかけて深々と恩師のことば励みともして

やり遂げたことより未だ叶わざることを思ひて明日に向ふ

震えつつ蛹の殻を脱ぎ捨てて蝶一枚の春の生誕

知らぬこと知りえた時の喜びをひとつ噛みしめ今日もまたゆく

立田山かならずサボる一齣の授業なりけり私の立場

自転車の背に乗せられて夕焼けをゆく青年の父の背の我

一本の楠の若葉の凜として我が体内に立木立つ朝

海を越え時を隔てて教え子の論文を読む学ぶ心に

これでいい、私がここにいた証ハーン碑石の傍らに立つ

学生の行き交う秋のキャンパスの的となりたるハーン碑石は

夕焼けを折たたみゆくいち枚の時の記憶のなかのふるさと

生きることをよろこびとして水色の海に便りを書く日々の歌

身を引いて顧みて知る一本の道は静かな光の舞台

前に在る真理のかたち東山魁夷の「道」のあおき草炎

ふり返る来し方行く末思われて時を恵みとしてまた生きる

認知と言語

==語からみた英語の世界==

[1] はじめに

- 人間は科学によって幸福になることはできない。が、現代において、もし科学がなかりせばもっと不幸であったかもしれない。(アンリー・ポアンカレ『科学の価値』)
- 理性の自己訂正というこの素晴らしい特性は推論のもっとも高級な種類である帰納的推論においてのみ本質的で、内在的で、また不可避免的であるように思われる(チャールズ・パース『連続性の哲学』)
- 研究者は物理化学的科学から生理科学に入れば全然新しい部門の事実に入り込むことは明らかである。....私の信ずるところでは、科学は修練されそして組織立てられた常識に他ならない。.... (トーマス・ハックスレー『科学談義』)
- 併し総てのものの方法は同一である。①事実の観察②比較及び分類(その結果として一般主題の提示)③推断(予知する)④検証(正しいか否かを確かめる)、斯くの如きものが何であれ総ての科学の方法である。(トーマス・ハックスレー『科学談義』)

[2] 英語学の仕事

- ・ 英語という言語現象に対して妥当な説明責任を果たすということ
(Why? --- Because) の鎖
作業仮説(hypothesis)の設定とその説明的妥当性を求める
- ・ 言語の法則あるいは原理とは何か? (Linguistic Designer との対話)
- ・ 言語は人間にとって認識の反映かつ伝達の方策である。
 - > 認識のメカニズムー 認知構造、概念構造
 - > 伝達の原理 (P. Grice, J. Searle, G.N. Leech R. Lakoff . . .)
 - > 認知語用論: 語形成、構文、コンテキスト
- ・ 言語能力とはどういう能力のことか?
 - > 自ら発した発話を話者自らの力で妥当性をもって点検できる能力
- ・ Interlanguage (中間言語) についての認識の大切さ
- ・ Native Speaker の言語的直感に迫る

[3] いくつかの「気づき」からの出発

- (1) 無生物主語から擬人法の研究へ (卒論の頃)
 - a. His visit frightened me (Cause---Result)
 - b. The village slept. "inhabitants in the village" 辞書記述への関心
(換喩表現: メトニミー)
 - c. Money talks. (隠喩表現: メタファー)
- (2) 文の意味決定は動詞が大きな働きをする
 - a. Too many cooks spoil the broth. (if~, then~)
 - b. Too many students play mahjong..
- (3) 意味拡張はコンテキスト(contextual knowledge)に由来する
 - a. He has a good dictionary.

- b. He is a walking dictionary.
- (4) 転換 (Conversion, Zero-suffix) の生産性
- a. One contained cold cooked vegetables and he wolfed them. (J.Clavell *Shōgun*)
- b. In winter the cold was knifing, and a chill, pale light filtered in through leaded windows. (ibid.)
- c. Though money still helps in the last years, holidaying in your own overseas property has become much more common. (Newsweek 5/26/03)
- d. The ship nosed into the sea trying to make way. (S. Maugham, *The Moon and Six Pence*)
- e.. We must try to perfect it. (M. Pei, *All About Language*) <stress-shift>
- f. He had never wronged me. (E.A.Poe, *Tales of Fear*)
- (5) a It was pleasant not to get up till one felt inclined and to breakfast in pyjamas. (S. Maugham, *The Travel Books*)
- b. supper dinner <転換語成立の制約条件> <blocking>
- (6) 句が語になるときの条件
- a. forget-me-not touch-me-not <lexicalization: lexical idiomatization>
時制の無効化
- b. "His family always blames the wife," Suganda explains matter-of-factly.
数量詞の無効化 (Newsweek, 11/25/029)
- c. a God-is-dead theology stick-to-it-iveness his on the spot speech
his standoffish attitude
- (7) 語が句を包含すること (恒常的)
- a. a heavy smoker & a heavy wrestler
- b. a truck-driver a church-goer
- (8) 接辞と文法化
- ・clock-wise の wise は何? "on this wise." <Grammaticalization>
- ・Now the birth of Jesus Christ was on this wise. ... *AKJV, St. Matthew* 1,18
- ・-fashion -like -person/man/woman -proof -scope -worthy -wright
- (9) 接辞の力
- nothingness の不思議
- (10) 同一語源結合の原則
- unkind--*inkind insane---*unsane <.etymological principle>
- activity --- activeness (activities ?activenesses)
- (11) 造語と生き残り
- beautiful (L+AS) と beauteous(L+L)
- (12) 接辞の辞書記述
- Anglo- は接頭辞(prefix)それとも連結辞 (combining form) ?
- AHD, LDOCE --- Pref/Suf
- OED, RHD, OALD, WED, Cobuild, --- CF(Combining Form)
- 他の接頭辞、接尾辞では辞書記述はどうか?
- ・接辞項目、発音、綴り、語源、意味、下位範疇、語例、語法説明
- 『英語接辞研究』(開拓社: 2006)

(13) 語形成要素と特徴

LF(Lexical Form), CF(Combining Form) & AF(Affixal Form)

- LF: [+contentive] [-dependent] [+stressed]
- CF: [+contentive] [+dependent] [+stressed]
- AF: [-contentive] [+dependent] [-stressed]

steam boat cardiograph unify [LF+LF] [CF+CF] [AF+AF]

(14) 語根(Root)を知る

- admit commit emit intermit omit permit remit submit
transmit [-mit: 送る]
- aggress(ive) congress digress egress ingress progress
regress [-gress: 歩を進める]
- deport export import purport report support transport
[-port: 運ぶ]
- assign consign design ensign resign [-sign: 印を付ける]
signal signatory signature signify significant assignment
designer designate resignation
- involve evolve revolve / conduce induce produce reduce

(15) 形態論と語用論

Diminutive(s) ----- [+attitudinal], [+evaluative], [+intimate], [+subjective]

John -- Johnny(ie) Anne -- Annie Victoria – Vicky(ie)

Thomas -- Tom -- Tommy <cognitive and pragmatic feature of diminutives>

(16) 日本語の動詞複合語[V+V]と英語句動詞[V+P]

- a. kiri tor-u cut off / nag-e sute-ru throw away
b. aruk-i mawar-u walk around
c. ore magar-u ori mage-ru / *ore mage-ru ori magar-u

Action-How + Action-What State

- d. John offered with his coat.

He upped and flew at me.

The truth will out.

Away with the thief!

- > off, away, down, up などの Adverbial Particle は動詞の機能をもつのではないか？ 辞書記述はどうなっているか？
- > 日本語の V1+V2 の複合動詞は自動詞同士(vi+vi)、または他動詞同士(vt+vt)が原則である。
- > V1+V2 は一般的であるが同義で V2+V1 の順序性はない（非逆位の原則）

tob-i agaru *agar-i tob-u / nage sute-ru *sute nage-ru

(cf.この逆位の組み合わせはあるが意味は全く異なる。

nuk·i das-u ·· das·i nuk·u / kake nuke·ru nuke ka(ga)ke·ru)

(17) 逆成 (back-formation)

He was really an active and energetic sightseer. (S.Maugham *The Travel Books*)

(18) 複合語の条件

- a. a blind man

b. a blind dog (green house red carpet blue pencil) <compound>
steam boat table tennis bull's eye

[4] 結び

>科学的とは

- ① Thomas Kuhn の Paradigm (パラダイム)
- ② Karl Popper の Falsification (反証可能性)
- ③ Charles Peirce の Abduction の推論
- ④ Royston M. Roberts の Serendipity の考え方

>科学の三つの相 (変遷)

- ① 自然科学： 物理学 天文学 地学 ——— 無機物
古代ギリシャ—コペルニクス—ガリレイ—
ニュートン—アインシュタイン—
- ② 生命科学： 生物学 生理学 医学 分子生物学 ——— 有機体
ルネッサンス (ハーヴェイ) —リンネ—メンデル
ジェン—ワトソン・クリック
- ③ 言語科学： 言語学 記号学 数学 ——— 記号 (index, icon, symbol)
20世紀 (ソシュール) —プラーク学派—エスペルセン
ブルームフィールド—サピア・ウォーフ—チョムスキー
—G. レイコフ/ラネカー
認知科学 脳科学 主体の科学 (メンタリズム)
(人間の意識から独立していない：主体・主観性の導入)

>言語科学と詩学

日常言語を詩の言語たらしめる条件とは何か？ (詩学への志)

R. ヤコブソン

ラフカディオ・ハーンの遺産

[1] ハーン曼荼羅

- ・ジャーナリスト ・教育者 ・翻訳者 ・民俗学者
- ・作家・文学者 ・科学ジャーナリスト

[2] ハーンのミッション

- ・身体は西洋から東洋（日本）へ
- ・『心』はことば（作品）を通して『東の国から』西洋へ

[3] ハーン理解の二焦点モデル

- ・神秘的・土着的（ヴァーナキュラー） 文化
- ・合理的・科学的・実用的 文明

[4] 移動

- ・ギリシャ（レフカダ）—アイルランド（ダブリン）時代（1850,6~1863）
- ・ダラム（アショー：聖カスバルト校）—ロンドン—シンシナティ—時代（1863,9~1877,10）
- ・ニューオーリンズ—西インド諸島（マルティニク）—松江—時代（1877,10~1891,11）
- ・熊本—神戸—東京—時代（1891,11~1904,9）

[5] 作品

新聞記事・エッセー：多数 再話文学：『怪談』他 小説：『チタ』『ユマ』
翻訳：モーパッサン ドーデ ゴーティエ ゾラ ボードレール フローベール等
民俗学的所産：『ゴンボ・ゼーブ』『クリオール料理』等
書簡：チェンバレン先生 西田千太郎 大谷正信 エリザベス・ビスランド
田辺勝太郎 藤崎八三郎 他

[6] 影響を受けた人物

ヘンリー・ワトキン ハーバート・スペンサー パーシバル・ローウェル
H. ファーニー 服部一三 西田千太郎 加納治五郎 秋月胤永 ルドルフ・
マタス アドリアン・ルーケッ G.W. ケーブル エドガー A. ポー
ダーノ夫人 オスカー・クロスビー

[7] 特記事項

- ・ギリシャ正教で幼児洗礼（レフカダ：聖パラスケヴィ教会）
- ・母はギリシャ人、父はアイルランド系イギリス人で軍医（クリミア戦争）
- ・シンシナティで一度黒人のマティーと結婚、州法にそむき解雇、破綻
- ・『シンシナティ・インクワイアラー』紙、『シンシナティ・コマーシャル』紙、
『アイテム』紙、『タイムズ・デモクラット』紙、『ハーパー』社

[8] 結び